

ヴィッラーニ・ゲー・アンドラーシュ『反射』における 西行受容とその問題点について

フィットレル エーロン
FITTLER Áron

はじめに

西行の西洋における受容としては、彼の和歌の外国語訳が主流になっている中で、ハンガリーの現代詩人ヴィッラーニ・ゲー・アンドラーシュは、西行の和歌を翻訳したうえ、自分の詩と短い散文を対照させるという形で、和歌と西洋詩、また日本と西洋の宗教思想との融合を試みている。

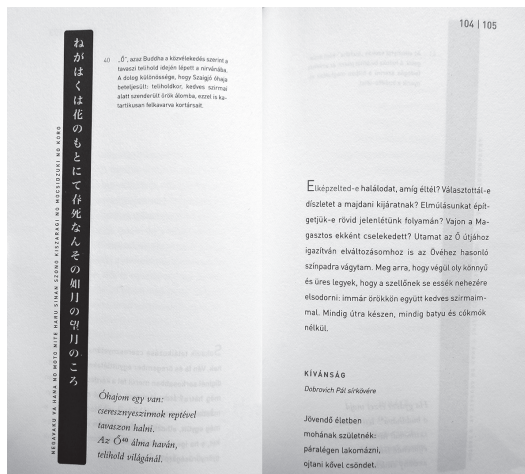
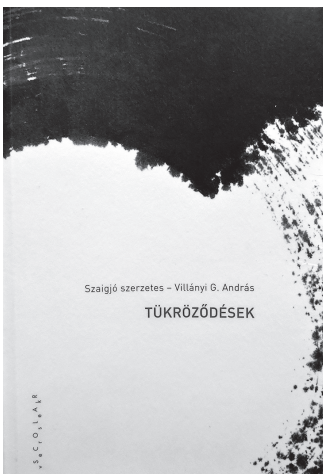
ヴィッラーニ・ゲー・アンドラーシュ (Villányi G. András, 1958～) は詩人と翻訳家で、1984年にブダペストの Eötvös Loránd 大学 (Eötvös Loránd Tudományegyetem) の英文学専攻を卒業した後、日本に留学した。最初に、神戸大学に修士課程を修了し、その後、大正大学で山田昭全教授のもとで一年間、それからオックスフォード大学でも一年間、西行についての研究を行っていた。本稿において紹介する『反射』(Tükröződések) という作品の本人が書いたあとがきによると、彼の詩と考え方に仏教の空と西田幾多郎などの日本の哲学者、およびドイツ神秘主義のマイスター・エックハルト (Meister Eckhart) とヤコブ・ベーメ (Jakob Böhme) の哲学が影響を与えた。また、詩の主なテーマは20～21世紀における「^{くう}空」、神と美の探求、被造物としての存在からの離脱への希求、自然の中でどのような教えが身につけられるのかを探ることであるという。

『反射』⁽¹⁾は2011年に出版され、西行の和歌75首を原文とローマ字表記で示し、

翻訳した。出典は一切明示されていないのであるが、原文が掲載されていることから、原典からの翻訳であることが想像できる。しかし、近時の講演会⁽²⁾にヴィッラーニ氏自身が、和歌は現代日本語訳から翻訳している、と述べていたという情報が入った。

『反射』には、それぞれの和歌にヴィッラーニ氏自身の説明が付されており、ほとんどの和歌にヴィッラーニ氏の詩または短い散文が付けられている。このような詩文によって、西行の歌とヴィッラーニ氏との対話がなされている。また、かなり概略的であるが、最初に西行と彼が生きていた時代やそのときの仏教についてのまえがきも付いている。本の形式を見ると、表紙と本の中身（次頁を参照）も、白と黒と朱を使っていることと、余白をたくさん残すことが目に付く。これは仏教と関わる内容と合わせたと考えられるが、このような外見は、むしろ禅の水墨画を連想させるのではないかと思う。

西行の歌とヴィッラーニ氏の詩文の以上のような対比はどのように行われて



『反射』の表紙と「ねがはくは」歌が載っている頁の構成。左の頁に、黒の背景に朱字で和歌の原文、その左側にローマ字表記があり、右下に翻訳が載っており、上に注が施されている歌もある。右の頁にヴィッラーニ氏の説明と彼自身の詩が載っている（説明の書きだしと詩の題名は朱字）。

いるのかというと、主にふたつの傾向が見られる。ひとつは実際に〈反射〉のような対比で、西行の和歌とヴィッラーニ氏の詩文が同じ、または類似する趣向やモチーフを日本と西洋の立場から表す、という形である。いまひとつは、西行の和歌を起点として、ヴィッラーニ氏自身の思いや感情が述べられる、という方法となっている。この他、翻訳においても、西行歌の日本での一般的な解釈と異なるとらえ方も見られる。しかし、以上ふたつの対比と翻訳における特殊なとらえ方に、ヴィッラーニ氏の和歌文学などに関する理解に不十分などころがあるのではないかという疑問も発生する。本稿では、ヴィッラーニ氏の西行受容の主な傾向を紹介しつつ、いくつかの問題点も指摘しておきたい。

1. 西行歌の選び方と配列について

1.1. 『反射』における西行歌の選び方

最初に、西行の現存している2000首以上の和歌から、どのようなものを選んだのかについて検討したい。次頁以降の表に、『反射』に採用されている七十五首の歌とその歌題をまとめてみたが、桜と月の歌が最も多いことが一目瞭然である。「花と月の歌人」と評価されている西行であるため、ヴィッラーニ氏も花と月の歌にもっとも注目し、こういった西行に関する概念が反映されていると言える。それから、恋の歌が少ないということも注目される。西行は僧侶の歌人の中でも恋歌が多い方であるものの、大半は歌合などの題詠である。採用された歌の内容から見ると、西行の隠遁生活や旅のとき、つまり修行中に詠んだ和歌が多く選ばれているため、ヴィッラーニ氏の関心があったのは、修行僧としての西行、そしてこういう西行の宗教観と、実際に思っていたことであり、題詠である恋歌などにはそれほど関心がなかったようである。彼の恋歌から数首選んだのみであることも、このためではないかと考えられる。また、いくつかの和歌に関して、その詞書の翻訳も付けるが、和歌の詠作状況や出典における部立から切り離して翻訳、解釈する傾向が強い。そのため、西行の家集または勅撰集に、たとえば恋歌として採録されている和歌を、恋歌でないものとし

『反射』における西行歌とその配列（※「裳」=『御裳濯川歌合』）

和歌の初 (二)句	所載の西行家集・ 勅撰集と歌番号	西行家集の 中の部立	歌題	主な他出	備考
惜しむとて	西行法師家集638	一	出家	玉葉集2467 (雑五)	
うけがたき	聞書集201	一	輪廻	新古今集 1751(雑下)	地獄絵を詠 んだ歌
野にたてる	山家集907	雑	来世		
現をも	山家集1515	百首(無常)	無常		
波こすと	山家集13	春	松・霞		
岩間とぢし	西行法師家集1	春	氷・水	裳22	
〔世を捨てて〕	山家集1240	雑	出家		俊成の西行 の歌への返 歌
浅く出し	山家集914	雑	道心		「道心逐年 深」を詠ん だ歌
はるかなる	新古今集1099	恋二	恋の物思い		上句は隠遁 生活の禪定、 翻訳では完 全に隠遁生 活の寂しさ として(→雑)
つくづくと ものを思ふに	山家集712	雑	物思い		
いづくにも	西行法師家集133	一	述懐(無常)		
水の音は さびしき庵の	山家集944	雑	嵐		隠遁生活
さびしさに たえたる人の	山家集513	冬	冬の山里		隠遁生活
あばれたる 草の庵に	山家集348	秋	月		隠遁生活
あばれたる 草の庵の	山家集1148	雑	風		隠遁生活
もろともに 影を並ぶる	山家集369	秋	月		隠遁生活
冬枯れの	山家集517	冬	月		隠遁生活
月はなほ	山家集413	秋	月		旅の宿
よられつる	新古今集263	夏	草・夕立		

和歌の初 (二)句	所載の西行家集・ 勅撰集と歌番号	西行家集の 中の部立	歌題	主な他出	備考
水の音に	山家集231	夏	蝉		
せを早み	山家集1426	雑	川の瀬・心 が澄む		
花のいろの	聞書集63	一	桜		「尋花欲菩提」を詠む
花散らで	山家集72	春	桜・月		
春風の 花を散らすと	山家集139	春	桜		散る花
ながむとて	山家集120	春	桜		散る花
花に染む	山家集76	春	桜	裳15	
思ひかへす	裳9	一	桜		
朝ごとに	山家集606	恋	「寄落葉恋」		
思出でに 花の波にも	聞書集185	一	桜		花と共に流 れる
わび人の 涙に似たる	山家集1035	雑	桜		散る花
木の本に	山家集125	春	桜		散る花
風さそふ	山家集134	春	桜		散る花
わきて見ん	山家集94	春	桜		
ねがはくは	山家集77	春	桜・涅槃	裳33	翻訳では散 る花
仏には	山家集78	春	桜・死後	千載集1067	翻訳では、 「桜の花を たてまつれ」 →「桜の花 を散らせ」
くまもなき 月の光に	山家集327	秋	月		
都にて	山家集418	秋	月		
深き山に すみける月を	山家集1104	雑	月		
月をまつ	西行法師家集72	冬	時雨・月	裳18	
雲晴るる あらしの音は	山家集362	秋	月・松		
木の間洩る 有明の月を	山家集345	秋	月		隠遁生活

和歌の初 (二)句	所載の西行家集・ 勅撰集と歌番号	西行家集の 中の部立	歌題	主な他出	備考
波の音を	山家集414	秋	月・波		旅の宿
有明は	新古今集1193	恋三	有明の別れ		翻訳と説明 から、恋歌 であることが 明確でない
月のみや	山家集727	雑	月		
名残おほみ	山家集426	秋	霧・別れ		「霧隔行客」 を詠む 〈一〉翻訳で は恋人同士 の別れ
よしさらば 涙の池に	山家集634	恋	月		翻訳では、 恋歌である ことが明確 でない
深き山に 心の月し	聞書集15	法花経 廿八品	月・悟り		安樂行品 「深入禅定 見十方仏」 を詠む
雲おほふ	聞書集141	論文	月・悟り		「八葉白蓮 一肘間」を 詠む
わしの山 月を入りぬと	山家集888	雑	月		『法華経』寿 量品題の歌
ふけにける	聞書集98	秋	月・老いの 述懐	裳16	
曇りなき 山にて海の	山家集1356	雑	月		
おしなべて ものを思はぬ	西行法師家集47	秋	秋風	宮河歌合 51	
時雨かと	山家集496	冬	落葉		「暁落葉」を 詠む
あはれいかに 草葉の露の	西行法師家集170	秋	秋風	裳33	
朽ちもせぬ	山家集800	雑	追悼		
津の国の 難波の春は	西行法師家集96	雑	無常	裳58	
ませにさく	山家集1026	雑	蝶・無常		

和歌の初 (二)句	所載の西行家集・ 勅撰集と歌番号	西行家集の 中の部立	歌題	主な他出	備考
我なれや 風をわづらふ	山家集1039	雑	篠竹・心細さ		
おほつかな 秋はいかなる	山家集290	秋	秋の悲しさ		
心なき身にも あはれは	山家集470	秋	秋のあわれ	裳36	
あられにぞ	山家集964	雑	落葉		
年月をいかで わが身に	山家集768	雑	懐(無常)	宮河歌合 57	
ふかく入りて 神路のおくを	千載集1278	神祇	風	裳71	
昔見し 宿の小松に	西行法師家集129	—	松・述懐		
たけうまを	聞書集167	—	回想		
雪ふれば 野路も山路も	山家集539	冬	雪・旅		
常よりも 心ほそくぞ	山家集572	冬	年末・旅		
山川の みなぎる水の	山家集873	雑	山川・老い の述懐		『涅槃経』 「人命不停 速於山水」
きりぎりす 夜ざむに秋の	西行法師家集67	秋	虫(きりぎり す)・無常	裳41	
ささがにの 糸につらぬく	山家集1514	百首(無常)	露・無常		
久に経て	山家集1358	雑	松・死後		
死にて伏さん	山家集850	雑	無常・死後		
風になびく	西行法師家集347	恋	富士に寄せ た恋(新古 今集による と、富士に 寄せた述懐)	新古今集・ 雑中・1615	
空になる 心は春の	山家集723	雑	霞に寄せた 述懐・出家 願望		翻訳と解釈 では、臨終 の心
末の世も	西行法師家集677	雑下	和歌の道が 常なること である	新古今集 1844	

て翻訳し、説明する例もある。また、「世をすてて入りにし道のことはぞあはれも深き色もみえける³⁾」（『山家集』1240）という一首は西行の歌ではなく、俊成が西行から和歌集へ歌を頼んだときの、西行の歌への返歌、つまり俊成の歌であるが、西行の歌として載録し、解釈する。

1.2. 桜の歌の採択傾向

西行の桜と月の歌が多く採用されていると述べたが、ヴィッラーニ氏はどのような桜と月の歌を選んだのかについて見てみたい。西行はさまざまに桜を詠んでいるが、大きく、以下のような内容に分類できるかと思われる。

① 桜が咲くのを待つ〔『反射』にナシ〕

いまさらに春をわするる花もあらじやすくまちつけふもくらさん（『山家集』58）

② 桜の花を雪に見立てる〔『反射』に一首〕

花のいろのゆきのみやまにかよへばやふかきよしののおくへいらるる（『聞書集』63）

③ 桜の花に染まる心〔『反射』に五首〕

はなにそむこころのいかでのこりけんすてはててきと思ふ我が身に（『山家集』76）

④ 古木の桜を詠む〔『反射』に一首〕

わきてみんおい木は花もあはれなりいまいくたびか春にあふべき（『山家集』94）

⑤ 風が散らす桜の花〔『反射』に三首〕

風さそふ花のゆくへはしらねどもをしむ心は身にとまりけり（『山家集』134）

⑥ 花が散ることを恨む〔『反射』にナシ〕

こずゑふく風のころろはいかがせんしたがふはなのうらめしきかな（『山

家集』122)

- ⑦ 満開の桜の下で死ぬ〔『反射』に一首（「散る花と共に死ぬ」と訳す）〕
ねがはくは花のしたにて春しなんそのきさらぎのもちづきのころ（『山家集』77)
- ⑧ 自分の墓に桜の枝を奉る〔『反射』に一首（「桜の花を散らせ」と訳す）〕
ほとけにはさくらの花をたてまつれわがのちのよを人とぶらはば（『山家集』78)
- ⑨ 桜の花が「根に帰る」〔『反射』にナシ〕
ねにかへる花をおくりてよしの山夏のさかひに入りて出でぬる（『山家集』1462)

まず、選ばれていない趣向を見ると、①の「いまさらに」の歌のような、桜が咲くのを待つという、伝統的な春の歌のようなものが多く見られる。また、⑥の「こずゑふく」の歌のような、桜が散ることを恨むという趣向の歌も、西行は多く詠んでいた。このような歌は世俗的な傾向が強いと思われるが、たとえば、⑨の「ねにかへる」歌のような、桜の花が「根に帰る」という、生命や世の中の循環という仏教色が認められる歌も散見される。しかし、このような和歌も『反射』からは漏れている。この最後のテーマを詠んだ歌を選んでいないが、ヴィッラーニ氏は仏教色が強い桜の歌に関心があったことが指摘できる。山田昭全氏は西行の多くの桜の歌を検討したうえで、彼の和歌に桜は仏の世界と直接つながると指摘する⁽⁴⁾。たとえば、桜の花を雪に見立てるというものは『反射』に採択されているものは「花のいろの」の一首のみであるが、これは雪山童子の説話を踏まえており、桜は雪山童子を指していると考えられていると山田氏が述べている。また、複数選ばれているものとして、心が花に染まるといふ、世俗的なこと（煩惱）と悟りのこと、つまり、真言宗に重視されている煩惱即菩提という問題に関する歌が見いだせる。さらに、風が散らす桜の花の歌からもいくつか選ばれている。その他、西行特有の例として、満開の桜の下

で死ぬことと、桜を供えて後世菩提を弔うことについての歌も選ばれているが、これらの歌の翻訳と解釈は当該歌の本来の心と異なるということに気付く。

1.2.1. 咲く桜から散る桜へ

以上に述べた歌は次の二首である。

ねがはくは花のしたにて春しなんそのきさらぎのもちづきのころ（『山家集』77）

ほとけにはさくらの花をたてまつれわがのちのよを人とぶらはば（『山家集』78）

特に「ねがはくは」歌は西行の代表歌のひとつであり、建久元年（1190）に祈願のとおり2月16日、「もちづきのころ」に入寂したことで同時代の歌人たちを感動させたことが周知のとおりである。ようするに、「そのきさらぎのもちづきのころ」という表現は、釈迦涅槃の2月15日を指すもので、花の下で死ぬということは、釈迦が娑羅双樹の下で涅槃に入ったということと重ね合わせられており、その下で西行が亡くなりたいたいと言っている。つまり、娑羅双樹の代わりに満開の桜の木がある涅槃図となる。しかし、ヴィッラーニ氏はこの歌を次のようにハンガリー語に訳した。

Óhajom egy van:

cseresznyeszirmok reptével

tavaszon halni.

Az Ő álma haván,

telihold világánál.

願うことがひとつ。

桜の花びらが飛び散るとともに

春死ぬこと。

あの方が入られた月に、

満月の光に照らされて。⁽⁵⁾

下線部のように、二句目の「花のしたにて」という叙述を、「桜の花びらが飛

び散るとともに」と翻訳しており、全く異なる内容となる。桜の木の下の涅槃ではなく、散る桜とともに散って亡くなりたいということになる。この訳し方によって、『反射』所収のヴィッラーニ氏の他の詩と散文にもよく見られる「空」になっていくというイメージとなるのではないかと思われる。この歌の他に、「ほとけには」歌の翻訳も、原典と異なると見られる。

Ha gyászt érzel majd	もし哀れみを感じるなら、
a buddhává lett iránt,	仏になった人に対して、
<u>szirmokat hints a hantra</u>	墓に <u>花びらを散らせ</u> 、
eljövendő létem	私の後世の
szerény emlékének.	ささやかな記念として。

「さくらの花をたてまつれ」という叙述は「(桜の) 花びらを散らせ」と訳されているが、「花」は原典に、枝の桜を指していると考えられる⁽⁶⁾。

この二首の他、「ながむとはなにもいたくなれぬればちるわかれこそかなしかりけれ」(『山家集』120) という歌にも、原典の「散る別れ」、つまり桜が散って自分がこの世に残るという別れも、桜と一緒に自分も散るというように訳されている。

Nevezzenek bár	役に立たない花見る人
mihaszna szírom-bámésznak!	と呼ばれても、
Mert időközben	この間
úgy összemelegedtünk:	馴染み合ったので、
<u>hulltukban hullok én is.</u>	(花が) <u>散ると同時に私も散る。</u>

また、説明に、桜は仏の験で、毎年改めるとき私自身も改めて、散るときは自分も散る、と述べている。これは、仏と一体になるということを指すかもし

れないが、この歌はもともと、散る花を惜しむ心を詠んでいるものである。もつとも、西行は花と共に散りたいという内容の、「もろともにわれをもぐしてちりね花うきよをいとふ心ある身ぞ」（『山家集』118）という歌も詠んではいる。

「ねがはくは」と「ながむとて」の二首のヴィツラーニ氏によるハンガリー語訳と解釈において、桜の花と共に散るという、原典とは異なる趣向が見られる。この相違は特に、西行の自分の死に方への祈願を表す「ねがはくは」歌のとらえ方に関して大きな問題となる。しかし、なぜこのような翻訳と解釈がなされていたのであろうか。この問題と関連して、櫻井陽子氏の興味深い論考がある。櫻井氏は平忠度の『平家物語』巻9「忠度最期」に見られる、「ゆきくれて木のしたかげをやどとせば花よこよひのあるじならまし」という歌の明治以降の解釈について次のように述べている。

「ゆきくれて」歌の桜に舞い散る桜を思い描く説明もある。美しく咲く桜が散る桜に変わり、死や滅亡のイメージが倍加される。これらは明治以降、国体と結びつけられ、軍国主義のもとで最大限に利用された桜の表象性と結びついている。⁽⁷⁾

忠度の「ゆきくれて」歌はもともと、「旅宿花」という題で詠まれたもので、旅の途中で、咲いている桜の木の下に野宿をすることを詠み、桜が主として自分を迎え入れてくれるだろうか、という内容である。それに対して、現代の『平家物語』解釈に運命の問題が特に強調されており、その中で、忠度の歌も平家一門の運命と滅亡と結び付けられ、散る桜として解釈されるようになった、と櫻井氏が述べている。

西行の「ねがはくは」歌のヴィツラーニ氏によるとらえ方を見ると、これと似たような傾向であるのではないだろうか。管見のかぎり、「ねがはくは」歌の「花」は明らかに散る花としてとらえられている日本での解釈は見当たらないが、いささか傍証となりうる叙述が、高橋英夫氏の「ねがはくは」歌に関する

見解に見いだせるだろう。

歴史上の出来事としては、西行の死は建久元年二月十六日のその一刻一瞬で終わったのだが、西行をつつみこんだあの桜花紛乱の世界は歴史的時間の外にある。それは建久元年でもないし、現在只今でもない。その空間では、桜がこうして散り敷いているかぎりは彼の死はつついているのである。⁽⁸⁾

また、この叙述の次に、西行が散る桜を特に好んでいたことに注目し、西行の死に関しても、高橋氏の中で散る桜のイメージが強いのではないか。桜ははかない人生を思わせるという、桜に関する一般的な概念が強いいため、あるいは西行の「ねがはくは」歌の「花」も散る桜として、西行の姿はその花と共に散って入寂するという考え方が成立したことが想像にかたくない。それに加えて、日本文化の中から、ハンガリーでよく知られていることのひとつは武士道とその世界観であり、散りやすい桜の武士のはかない人生の象徴としての印象が最も強い。このように見ると、ヴィッラーニ氏の、「ねがはくは」歌と「ながむとて」歌の原典と異なるとらえ方にも、このような現代的な考え方、またハンガリーにおける桜のイメージも影響を与えたのではなかろうか。

しかし、特に「ねがはくは」歌は西行特有の珍しい発想であり、実際に2月16日に入寂したという事実から見ても、正確にとらえることが重要であると考ええる。

1.3. 月の歌の採択傾向

次に、『反射』における月の歌の採択傾向について見ていきたい。西行のほぼ全ての月の歌に、月は仏や悟りと関わり、仏教的象徴として詠まれている。主な趣向はおおよそ、以下のようになろう。

① 雲に隠されない月〔『反射』に三首〕

雲はるるあらしのおとは松にあれや月もみどりの色にはえつつ（『山家集』362）

② 雲に隠される月〔『反射』に一首〕

いでながらくもにかくるる月かげをかさねてまつやふたむらの山（『山家集』383）

③ 隠遁生活の中の月〔『反射』に七首〕

あばれたる草の庵にもる月を袖にうつしてながめつるかな（『山家集』384）

④ 旅の月〔『反射』に三首〕

くもりなき山にてうみの月みればしまごこほりのたえまなりける（『山家集』1256）

⑤ 心の中の月（心月輪）〔『反射』に三首〕

くもおほふふたかみやまの月かげはこころにすむやみるにはあるらむ（『山家集』141）

⑥ 山の端に入る月〔『反射』にナシ〕

いざよはでいづるは月のうれしくていづるやまのははつらきなりけり（『山家集』312）

⑦ 水に映る月〔『反射』にナシ〕

みさびるぬいけのおもてのきよければやどれる月もめやすかりけり（『山家集』320）

⑧ 月と露〔『反射』にナシ〕

あさちはら葉ずゑの露のたまごとにひかりつらぬく秋のよの月（『山家集』316）

⑨ 「寄月述懐」〔『反射』に三首〕

ふけにける我がみのかけをおもふまにはるかに月のかたぶきにける（『聞書集』98）

⑩ (恋の) 物思いをさせる月〔『反射』にナシ〕

なげけとて月やは物をおもはするかこちがほなるわがなみだかな（『山家集』628）

⑪ 霊鷲山の月〔『反射』に一首〕

わしの山月をいりぬとみる人はくらきにまよふ心なりけり（『山家集』888）

このような月の歌の中からも、『反射』に採用されているものは①と②の雲に隠れるか隠れないかを詠んだものや、前述のように、隠遁生活、または旅の修行のときに見ている月の歌である。しかし、旅の歌の場合は、歌枕を詠んだ多くの和歌からはほとんど選ばれていない。また、⑤の「くもおほふ」歌のような心の中の月、つまり心月輪を詠んだ歌も三首選ばれている。一方、月を詠んだ和歌で、仏教と関わる例も多く、西行の歌にも多く見られる、山の端に入る月と水に映る月を詠んだものは選ばれていない。また、西行の歌に露と月が一緒に詠まれている歌も複数見られ、山田昭全氏が指摘するとおり、このような歌に露は衆生の本来具えている清浄な心である自性清浄心の象徴となっている⁹⁾。しかし、『反射』にこのような歌は採択されていない。また、月を詠んだ恋歌も選ばれていない。草庵と旅の仮の宿りに泊まって、月などの自然景物を観想している様子を詠んだ歌を多く選んでいることから、禅定に入っている西行像のイメージが強かったと見られる。

1.4. 『反射』の巻頭巻軸の歌

本節では、『反射』の巻頭巻軸の歌について見ておきたい。

『反射』の巻頭に置かれている和歌は、西行が鳥羽院に出家の暇乞いをしたとき送った次の歌である。

鳥羽院に出家のいとま申すとてよめる

をしむとてをしまれぬべきこの世かはみをすててこそみをもたすけめ

(『西行法師家集』 638)

つまり、作品は西行の出家で始まり、その後、彼の人生の多くを占めている修行のときに詠んだ歌や、煩惱と悟りの問題に関する歌を並べ、終わりに近づくと無常と死に関わる歌が多くなるという配列になっている。そこで、特徴的なのは、巻軸に置かれている次の歌である。

寂蓮、人人すすめて百首歌よませ侍りけるに、いなび侍りて、熊野
にまうでつる道に、なに事もおとろへゆけど、此みちこそ、世のす
ゑにかはらぬ物はあれ、なほこの歌よむべきよし、別当湛快三位俊
成に申すと見侍りて、おどろきながら、此歌をいそぎよみ出して、
つかはしけるおくに、かき付け侍りける

すゑの世もこの情のみかはらずと見し夢なくはよそに聞かまし(『西行法師家集』 677)

この歌は、西行が熊野詣の途中、寂蓮から百首歌の詠作への依頼を受けて、拒否しようとしていたとき、熊野本宮の湛快が俊成に、和歌の道だけがいつまでも変わらないものだと言っていることを夢に見て、百首歌を詠み、その奥に付けたものである。この歌の場合は、『反射』に詞書も翻訳されている。この場面と「すゑの世も」歌は和歌の道の不変、つまり和歌の意義についてのもので、日本では歌論書や和歌集の序によく論じられているものの、これを題材とした和歌自体は、管見のかぎり、それほど多くない¹⁰⁾。それに対して、西洋詩において、ある詩人が詩の意義、また自分の詩人としての活動の意義について詩を詠むということは通常の慣習であり、詩人としての抱負を表す内容の詩がよく詠まれる。ヴィッラーニ氏のこの歌に付けられた自分の詩は、次の「Horatius」というものである。

Horatius

ホラーティウス

I.

írjad pergamenre
véssed bár gránitba
harmatlétű minden
nincs mi ércnél maradandóbb:
nincs maradandó
(以下略)

I.

紙に書いても
花崗岩に刻んでも
すべて露のようにはかない
青銅より歴史に残るものはない
歴史に残るものはない
(以下略)

この詩は、ホラティウスの『歌集』第3巻の最後にある『エピローグ』という、自分の実績が永遠に残ることと、自分が最初にローマでギリシアの詩を詠んだ、ということを主張する詩を踏まえている。

私は遂に記念塔を
完成せしめた、青銅より
歴史に残る記念塔を……
エジプト王を記念する
ピラミッドよりも高い塔を……
それは雨にも犯されず、
年月がたち、時を経ても、

手のつけられない北風にも、
この記念碑は崩れまい。
私が死んでも、残るだろう。
私の仕事の大部分は
リビティーナ（死神）を避けるだろう。

そして、私は、新しく
後の評価を受けるだろう。⁽¹⁾

西洋詩に詩人としての自己意識を表すことが通例であるため、西行の修行生活に関する和歌の列を、たとえば辞世の歌などではなく、この歌とそれと類似する内容の自分の詩で、ヴィッラーニ氏が結んだのではないかと考えられる。

2. ヴィッラーニ氏の詩文における西行受容

2.1. 〈反射〉のような対比

最後に、ヴィッラーニ氏の詩文における西行受容に触れたいが、そのひとつの傾向は、〈反射〉のような対比である。

秋風

あはれいかに草葉の露のこぼるらん秋風立ちぬ宮城野の原（『西行法師家集』170）

SORS	定め
őszi lombokon	秋の木の葉に
villogó esőcseppek	輝く雨の露
.....
.....
.....
<i>először a cseppek</i>	始めに露
<i>majd</i>	次いでに
<i>a lomb</i>	葉〔が吹き散らされる〕

西行の和歌とヴィッラーニ氏の詩に、ほぼ同じような秋の風景が詠まれている。いずれも、秋風に吹き散らされていく露を詠んでおり、日本と西洋文学にも秋の風景描写で表されている無常が詠まれている。このように、西行の和歌とヴィッラーニ氏の詩もほぼ同じ趣向を詠んでいるものに、このような無常を題材とするものが圧倒的に多い。

これに対して、ヴィッラーニ氏が類似すると見ている、仏教とキリスト教の教理に基づくことを対比する、次のような例も見いだせる。

(地獄糸を見て)

うけがたき人のすがたにうかみいでてこりずやたれも又しづむべき (『聞書集』201)

VILÁGOM TEREMTÉSE

Márkus „Remete” Ferencnek

Az univerzumból egy akkora darabkáért, amekkora vagyok: felelőssé tettek. Ez azt jelenti, hogy a mindenség egy ekkorka porcikáját az én lelki szemem felügyeli. Ez a szem, lám, összekötöttet a legmagasabb látással, amellyel egymást tükrözik. Az ember méltósága mulandósága nemességében rejlik; Istené a kenózisban, mert vállalja a mulandóság elszenvetését, és meghal a kereszten.

我が世の創造

マールクシュ「仙人」フェレンツへ

宇宙の、自分と同等の大きさの部分が私に任された。これは、宇宙のこのかけらは私の心眼が見守るとのことだ。この眼は、最上の視覚と結び付

けられ、交互に反射し合うのだ。人間の尊厳は、その無常の尊さにある。そうして、神の（尊厳）は、無常の苦を受けて十字架の上で死ぬため、ケノーシス¹²にある。

西行の歌は、もともと地獄絵を詠んだもので、輪廻転生の中で人間として生まれることが珍しいことであり、また三悪道に沈む可能性もあるということ詠んでいる。一方、ヴィッラーニ氏の散文には、同じく人間としてこの世に生まれ、責任を持って生きるという、キリスト教的人生観について述べており、最後に、神が人となって十字架の上で死ぬということで、創造神が仮に、人間と同じ無常の存在を得たことを加えている。

2.2. 西行の和歌を起点として、ヴィッラーニ氏自身の思い・感情などが述べられる例

西行の歌とヴィッラーニ氏の詩文の対比に、西行の歌を起点として、ヴィッラーニ氏自身の思いや感情が述べられているような対比も見られる。

（心におもひける事を）

のにたてるえだなき木にもおとりけりのちの世しらぬ人の心は（『山家集』907）

TÖLGY

柏

mintha szállni vágyna

飛び去ろうとして

ágakkal kapaszkodik az úrbe

枝で宇宙にしがみつ、

száz és száz szárnyal

何百もの翼で

a biztos pontot tapintva

抛り所を探りつつ、

már is emelkedne

今や飛び出そうとする

tolná a magasba remegett koronát	高く震える茂み、天と地の間に
ég s föld közé préselt törzsét	押さえられた幹をつき出そうとし、
horgas gyökerét feltépné	曲がった根を(地から)破り出そうとし、
hármasságát a kékbe emelve	この三部を青さ〔青空〕にあげて、
végre <i>semmi</i> lenne	ようやく〈無〉となろうとする

西行の歌は、後の世を思わない人は、野原に立っている枝がない枯れた木にも劣っていると言っているが、ヴィッラーニ氏がその中なら木だけを取り出して、「柏」という詩に、空の方に向かって、最後に無になる柏の木を描いている。この詩と対になっている西行歌との共通点を見出ししてみるなら、柏の木が擬人化されており、自分の後の世のことを思って空の方に向かってしていると解釈できるかと思う。ただ、ここにいう「無」はおそらく「^{くう}空」を言っているが、「空」と「無」は西行の和歌の翻訳と説明にも混同されている例が見られる。これは、「空」と「無」が本来よく混同されている¹³⁾ことの影響であると思われる。しかし、空は無でもなく、有でもないのと同時に無でもあり、有でもあり、固定的実体のないことを表しており、存在しない状態を表す「無」とは異なる。

『反射』において、たとえば、西行の自讃歌である「風になびく富士の煙の空にきえて行へも知らぬ我が思ひかな」(『西行法師家集』347)という歌の翻訳と解釈に「空」と「無」の混同が見られる。ヴィッラーニ氏は「風になびく」歌のふたつの解釈と翻訳をするが、そのひとつに富士の煙が「空の無に」消えるというように訳している。

Szélbe hajlított	風に曲げられた
füstgomoly a Fudzsiról,	富士の煙は
<u>égi semmibe</u>	^{そら} 空の無に
foszló, ám ki sejtheti	消えるが、だれが知るだろうか、
izzó vágyam nyughelyét?	(私の)燃えている思いの静まる所は。

しかし、富士の煙が空に消えるという原典の風景は真言宗の空観を表すものであり、「そら」は「空^{くう}」を指していると考えられている。そもそも、ヴィッラーニ氏は「風になびく」歌のふたつの翻訳をしたうえ、『反射』の最後にそのふたつの解釈について詳細に述べているが、そこでも、「富士山と存在の円満を包み込むそらの膨大な深さは底もない空^{くう}そのものであり、無である」(Az égbolt roppant mélysége – amely átöleli a Fudzsit, amiként a lét teljességét – maga a feneketlen üresség, a semmi. (『反射』200頁)) という形でふたつの用語を用いている。一方、このような見方は日本にも見られる。たとえば、「ねがはくは」歌に関連してとりあげた高橋英夫氏は「風になびく」歌について次のように述べている。

「富士山」(稿者注——「風になびく」歌のこと)では、そうした人生的時間を身のうちに重く熱く把持して向き合った富士の高嶺が、噴きあげた噴煙の薄らぎ消えてゆくのに似て、西行の内なる重く熱いものをいずかたへともなく誘い出し、空中に漂わせ、風に乗せて消滅させてしまうのである。ここに西行の命と時間を無化するものが見出され、詠じられている。無が歌を透明にしている。¹⁴⁾

また、同じところに、「晩年の心境として、人生諸事万般、帰するところは「無」であり、すべては噴煙さながら消えてゆく運命にあると考えるのは自然である」とも述べており、富士山の噴煙が空に消えることを「無」の実現としてとらえている。一方、山田昭全氏は「風になびく」歌と同じく有名な「心なき」歌に関して、「西行は、広大な空間に吸い込まれるように消えてゆく景観にいたく感動をさそわれる歌人であった、という理由で私は、この二首も空観の歌と見る」と指摘しており¹⁵⁾、真言宗の空観の歌として見ている。ヴィッラーニ氏は「空^{くう}」と「無」というふたつの用語を混用していることによって、結果的にふたつの概念を混同し、正確にとらえていないといわざるをえない。

また、周知のとおり、「風になびく」歌は『西行法師家集』347に恋歌の中に配列されているのに対して、『新古今集』には雑中（1615）に載録されているため、恋歌ではなく、雑の歌（内容から見て述懐の歌）ととらえられている。この場合、「我が思ひ」は仏教的煩惱のこと全般を指しており、仏教色が一層深くなる。ヴィツラーニ氏が説明にも明記しているとおり、このような仏教的な問題を基に解釈する。しかし、恋歌としてのとらえ方もあることについては言及しない。ヴィツラーニ氏のふたつの解釈は、①富士の煙と詠歌主体は自分の意思で「風になびく」のか、または②外的要因によって風に「従う」のかというふたつのとらえ方である。上に引用した翻訳に見られる「風に曲げられた」という訳し方は②の解釈を反映しており、①の解釈の基には以下のように訳されている。

Szélbe simuló	風に溶け込む
Fudzsi gomolyfüstjeként	富士の煙として
ég nyeli majd el	(後に) 空が飲み込む、
nyomtalan szertefoszló,	跡かたもなく消えていく、
elizzó vágyaim.	燃え尽くす私の思いを。

したがって、恋歌であるのか、あるいは雑歌であるのかという、原資料に基づいた基本的な問題には触れず、雑歌としてとらえ、その前提で解釈を展開していくことになっている。

3. まとめ

以上を簡単に総括してみると、まず、『山家集』などの西行家集の翻訳という西洋の一般的な西行受容に対して、ヴィツラーニ氏は西行の仏教思想、煩惱から逃れることと悟りを得るための自然の中の修行に着目し、それに関わる歌を採択し、翻訳した。その中でも草庵に禪定に入っており、月などの景物を観想

する西行像の印象が強いことが、西行の歌の選び方からわかる。また、西行の桜の歌に関しては、散る桜への傾倒が特に強く、原典と内容が大きく異なる翻訳をすることによって、桜とともに散って入寂する西行が想像されていると見られる。このようなとらえ方は西行当代のそれに比して、現代に一層強くなっている桜と死の結びつきの概念の影響によるものではないかと考えられよう。

一方、ヴィッラーニ氏は歌人である西行に関して、無常の世の中での和歌の永遠性を主張することに特に注目する。そのため、西洋の詩人の実績に欠かさないといえるテーマである詩歌に関する考えについての和歌を、作品の最後に置いたと思われ、西洋の詩歌観の影響も見られる。

また、詳細な検討にはまだ至っていないが、仏教と西洋の宗教思想との融合への試みは興味深いものの、「空」と「無」などの仏教用語の使用の混乱によって、西行当代の仏教と西行の和歌が正確に伝わらなくなるため、注意が必要であるということを付言したい。さらに、現代などのとらえ方、または恣意的な解釈を基にした和歌の翻訳と説明に関しても同じ問題が発生する。第一人者として、ある異なる文化圏の作者ないし作品、または受容する読者にまだ知られていないそれを紹介するなら、たとえその影響を受けて新しい文学作品を著わすとしても、最初は正確に、当該作者が生きていた、または当該作品が成立した時代の文化的・思想的背景や考え方に基づいて伝達することが重要であると思われる。

【注】

- (1) Szaigó szerzetes-Villányi G. András: *Tükröződések*. Scolar 出版、ブダペスト、2011年
- (2) 『Műhely』という文芸文化誌の日本文学・日本文化関連特集（『Műhely Kulturális Folyóirat』2018. XLI/5-6）に関わる講演（<http://mjbt.hu/2018/10/meghivo-a-muhely-folyoirat-japan-szamanak-bemutatojara/>）（最終閲覧：2018年11月30日）
- (3) 和歌資料の本文と歌番号は日本文学 Web 図書館所収『新編国歌大観』による。
- (4) 『西行の和歌と仏教』（山田昭全著作集第四巻、おうふう、2012）第6編「西行の信仰と生活」第3章「西行と自然」（初出は『仏教文化学会紀要』第13号）に次のように述べる。「西行の桜は、雲とか雪とか、あるいは娑羅双樹とか、自由に発想が変わっていくのです。移り変わっていきます。そしてやがてそれが釈迦の涅槃だとか、あるいは雪山童子だとか、日月淨明德仏だとか、こういうよ

うな仏の世界そのものにつながっていきます。」

- (5) 和歌のハンガリー語訳とヴィッラーニ氏の詩文、説明の日本語逐語訳は稿者による。
- (6) この歌は僧正遍照の有名な、「折りつればたぶさにけがるたてながらみよの仏に花たてまつる」（『後撰集』春下・123）という歌を本歌取りしていると考えられているが、この歌の場合は、木のままの枝として仏に桜を供養することになっている。また、同じく遍照のこの歌を踏まえたものに、次の歌もある。

広修供養

我以広大勝解心、深信一切三世仏、悉以普賢行願力、普通供養諸如来

さしながら三世のほとけに奉る春咲く花も秋のもみちも（『発心和尚歌集』8）

この歌の場合も「さしながら」、つまり挿したままに花と紅葉を仏に供養する。

- (7) 『『平家物語』にうたわれる「桜」』（『駒澤国文』55〈パネルディスカッション「桜の記憶——日本文学史の磁場として」〉）
- (8) 『西行』（岩波新書277、岩波書店、1993）第1章「桜に生き、桜に死す…」
- (9) 注(4)前掲書、同編同章
- (10) このような内容の西洋詩と類似すると言える例として、次の『久安百首』の長歌があげられよう。
- 山の辺の あともへだてぬ 身なれども この人かずに いりしより 花の香とても わす
られず 月の秋にも 思ひでて 心にかけぬ ときもなく わかのうらなみ うちいでて
甲斐なかるべき ことのはの みな恥かしの もりにふく 風のきこえを つつめども こ
やの池水 いひいでて やがてやみなば なほをしく おもひあまりに かきつむる 蟹の
もくづの すゑのよに のこりとまりて 見む人の そしらん事も はばからず もも歌か
ずを つらねつるかな（199・公能）
- (11) 鈴木一郎訳『ホラティウス全集』（玉川大学出版部、2001）所収の本文による。
- (12) 「Kenosis」（ギリシア語）は、キリストが受肉によって自らを空にしたというキリスト教の教えを示す語。
- (13) 「たんなる虚無や無を空と誤る謬見はたえず排斥される」（『岩波仏教辞典』（岩波書店、1999）「空」項）という断り書きまで見られる。
- (14) 注(8)前掲書、第6章「晩年と無」
- (15) 注(4)前掲書、結章1「西行の和歌と仏教」

付言 当初のプログラムの題目から多少タイトルを変更した。

* 討論要旨

櫻井陽子氏は、ヴィッラーニが訳を作るときに日本の現代語訳を参考にしたという話があったが、それはどれくらい影響しているのか、その現代語訳の作品は分かるのか、と質問した。発表者は、勅撰集のものは勅撰集の現代語訳、『山家集』『聞書集』『西行上人集』は和歌文学大系の現代語訳が参考にされた可能性が考えられるが、具体的な出典については分からない、と回答した。櫻井氏は、西行の歌に関する解説の本の訳ではなく、一般的な注を自分で抜き出して用いている可能性が高いということかと確認し、発表者は、その可能性も考えられ、加えて、ヴィッラーニが学んだ山田昭全氏の説や論文を読んでいることが想定される、と述べた。また櫻井氏は、発表中に西行の歌の訳について、散る桜とともに、と誤訳されているという説明があったことに関して、『平家物語』の「忠度最期」の章段における「ゆきくれて…」の歌を例に出し、この歌も、満開の桜の下という理解であったものが、昭和50年代頃になると散る桜の下という現代語訳が付されることがあることに触れ、そうした例を踏まえると、どこかに元になった現代語訳があるのではないかと考えられるため、ヴィッラーニの独自の訳なのかどうか

は確認した方が良いのではないかと指摘した。(※上記の内容は、本稿に反映されている)

ビュールク トーヴェ ヨハンナ氏は、ヴィッラーニが選択している歌の基準はあるのか、と質問した。発表者は、おそらく一番関心があったのは宗教的な問題で、煩惱から悟りへどう抜け出でていけるのかというところに関心があり、そうした歌に注目しているのではないかと歌の選択から考えられる、と回答した。またビュールク氏は、ヴィッラーニの他の作品にもこうした傾向が見られるのか、この作品のみなのか、と質問した。発表者は、ヴィッラーニは与謝野晶子の『みだれ髪』や石川啄木の『悲しき玩具』も翻訳しているが、それらは純粹に翻訳である一方、この作品が特殊であり、自分の詩や関心のある考え方を取り入れ、それに関する西行の詩を選んでいる、と回答した。